

## 日本赤十字の父 佐野常民



佐野常民

1877年（明治10年）、日本で最後の内戦である西南戦争が始まった。そして、3月には熊本市北方の田原坂で、約5万8千人の政府軍と約3万人の薩摩軍が入り乱れての激しい戦いが続いた。

戦死者を並べてとりでにするような戦いであった。負傷者は両軍とも民家などに収容したが、屋内からあふれ庭先に並べられた救護する人や薬は間に合わず、重傷者は水を求めてはい回り、そして、土に伏して死んでいった。

手当をすれば助かる負傷者が次々と死んでいく状況に心を痛める多くの人々がいたが、その中で敵味方の区別なく負傷者を救護する組織を作ろうと考えた人がいた。元老院議員（いまの国会議員のような仕事をする人）佐野常民である。現在は当たり前と思われるが、当時としては初めて耳にする特別な考えの組織をどうして佐野常民は作ろうとしたのであろうか。

佐野常民は九州佐賀藩の武士の五男として生まれたが、9歳で藩医の佐野家の養子となり以後京都、大阪、江戸で医学などを学んだ。

そして、明治になる前年の1867年に、佐賀藩の代表としてフランスのパリ万国博覧会を見学した。その会場見学のある日、佐野常民は、白地に赤い十字の印をした赤十字の展示館に注目した。国際的な救援組織である赤十字はその4年前の1863年に創設されたばかりであった。そして、敵味方の区別なしに傷ついた兵士を収容して看護する人道的なその考えに深い感銘を受けた。それは、大阪の適塾で師の緒方洪庵から学んだ人命尊重の精神「不治の病者（治る見込みのない病人）も棄てかえりみざるは人道に反する」の教えと相通じるものがあつた。田原坂はまさに、アンリー・デュナンが最初の救援を行ったソルフェリーノの丘と同じように負傷者であふれ救いの手を待っている。それを見過ごすのは人道に反すると佐野常民は考えたのである。

そのようなことから、西南戦争のさなかに負傷者の救護をする組織である博愛社をつく

ることを友人の元老院議官大給恒おぎゅうゆずるとともに政府に願い出た。しかし、「賊兵ぞくへい（敵兵てきへい）を助



大給 恒

けるとは何事か」という理由で断られた。佐野常民は屈しなかった。南戦争の政府軍の本部である熊本せいとうそうとくふありすがわのみやたるひとしんのうの征討総督府有栖川宮熾仁親王にお会いし、博愛社はくあいしゃをつくることを願い出た。幸い佐野常民の熱心な訴えが実り、1877年5月1日（明治10年）に許可を得ることができた。

佐野常民は感きわまってうれし泣きをしたという。日本赤十字社が5月1日そうりつを創立記念日にしているのはこの日のためである。早速、佐野常民は博愛社の5か条の規則を次のように決めて救援活

動をはじめた。

第一条 博愛社の目的は戦場の傷病者を救うことであり、戦争には一切かかわらない。

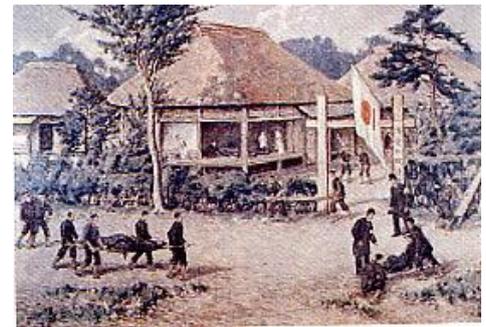
第二条 活動の資金は社員の出すお金と 有志の出し

第三条 てくれるきふきん寄付金きふきんでまかなう。

第四条 救護いしや かんごにんをする医者や看護人などは衣類いるいの上の特  
別のしるしをつけ遠くからでもわかるようにする。

第四条 敵の傷病兵でも救えるものは救う。

第五条 国の法律を守り、軍医長ぐんい ちょうかん官の命令に従う。



活動を始めたころ、西南戦争は終わりに近づいていたので、十分な活動はできなかつたが、それでも従事した博愛社の救護員は199人、救護した傷病者は1,429人であった。

西南戦争が終わってから、佐野常民は博愛社のかくじゅう拡充に力を注いだ。それには一定以上のしきん資金を出してくれる社員しゃいんを増やさなければならない。明治11年の社員はわずか38人、それから多い年で18人、少ない年では8人しか加入してもらえなかった。佐野常民は人を見ると赤十字への加入を呼びかけた。そのため、自宅を3回、4回訪問することは当たり前、中には7度訪問し、根負けして加入した者もいたほどである。

佐野常民の次の目標は国際赤十字への加盟であった。そのため、専門の病院を作ったり、かんごふようせい看護婦養成に力をそそいだ。そのような努力もあり、明治19年日本は国際赤十字に加盟し、翌年の明治20年、博愛社は日本赤十字社となり、佐野常民は初代社長となった。

戦争で苦しむ兵士を救うことを目的として作った赤十字であったが、佐野常民は戦争のない平和な社会でもさいがい災害などで苦しんでいる人たちに救いの手をさしのべることも赤十字

の使命であると考えた。

そこで、明治20年の磐梯山大噴火ぼんだいさんだいふんかや明治24年の濃尾大地震のうびだいじしんのような自然災害しぜんさいがいにもそれらの救護活動に熱心に取り組んだ。

そして、明治27年～28年の日清戦争にっしんせんそうでは日本赤十字社は1,384人の救護員せんちを戦地に送り、清国の捕虜しんこく ほりよ1,484人を含む101,768人の傷病者の救護に当たった。

これらの活動が新聞等で報道ほうどうされ、それにしただがって、赤十字の社員いちじるも著しく増えていった。明治25年には23,000人、明治31年には500,000人に達した。

そして、明治35年12月7日佐野常民は80歳で博愛の心をつらぬいた生涯しょうがい とを閉じた。まさに、日本赤十字の父といえる一生であった。

参考にさしていただいた本

「日赤の創始者 佐野常民」

吉川龍子著

「佐野常民伝」

河村健太郎著

「よみがえれ博愛精神」

佐野記念館館長

山本光彦著